

I-21 食道アカラシア手術症例とアカラシア術後癌化症例の検討

沖縄ハートライフ病院外科¹⁾、琉球大学第一外科²⁾

奥島憲彦¹⁾、久保尚士、竹島義隆、宮平 工、仲地広美智、天願 勇、長濱正吉²⁾、草野敏臣、武藤良弘

【はじめに】食道アカラシアに対し、Jekler-Lhotka 変法を行い、良好な治療成績を得たので報告する。又、アカラシア術後癌化 3例の検討も併せて行った。

【結果】(1) 食道アカラシア 4例で、嚥下困難が著明に改善した。LESPが術前平均28mmHgから 9mmHgと低下した。内視鏡検査でも通過の改善を認め、逆流性食道炎の所見は無かった。術後大きな合併症は無かった。術後 2年～7年、比較的長期の経過も良好である。(2) アカラシア術後癌化例は 3例でstage III 1例、stage 0 2例であった。3例ともにアカラシア術後嚥下困難は改善していたが、4年目、14年目、27年目に発見された。stage IIIは嚥下困難で発見され、stage 0の2例は自覚症状無く、定期的な内視鏡検査の発赤所見で発見された。部位はIu、Im、Im+Iiであった。stage IIIの症例には右開胸胸部食道亜全摘術を行ったが術後11カ月、再発死した。m2のIIc例では非開胸食道抜去術を行い、5年後再発はない。m1のIIc多発例では2病変ともEMRを行い、6カ月後再発はない。

I-22 食道癌におけるCyclin D1及びp16の発現パターンに関する免疫組織学的検討

富山医科薬科大学第2外科

田内克典、坂本隆、清水哲朗、斎藤光和、榎原年宏、津沢豊一、井原祐治、笹原孝太郎、岸本浩史、藤巻雅夫

【目的】G1 cyclinsの1つである cyclin D1は CDK4と結合することにより細胞周期を制御しているとされ、またp16は CDK4と結合することにより cyclin D1とCDK4の結合を障害するとされている。今回、食道表在癌での両者の発現を免疫組織学的に検討し報告する。【対象と方法】食道表在癌切除標本22例のパラフィン包埋切片を対象とした。120℃5分の熱処理後、Anti-Human Cyclin D1 Monoclonal Ab, Anti-Human p16 Monoclonal Ab (PHARMINGEN)を使用しABC法にて施行した。腫瘍細胞の核陽性像が腫瘍の90%以上を呈した症例を(+), その他を(-)とした。【結果】p16は17例(77%)、cyclin D1は2例(9%)に陽性像を認めた。染色性の組み合わせ(p16/cyclin D1)では、+/-:17例、-/+ :3例、+/+ :1であった。リンパ節転移例6例では、+/-:4例、-/+ :1例、+/+ :1例であった。【結語】食道表在癌においてはp16陽性 cyclin D1陰性の症例が多く、細胞周期調節機構は保たれていると考えられた。p16陰性 cyclin D1陽性の1例はリンパ節転移例であり、両者の発現の検討が悪性度の指標になる可能性を示唆した。

I-23 食道癌切除例におけるVEGF, PD-ECGF(TdR Pase)の発現と臓器転移再発の関係

東京女子医科大学消化器病センター外科

中村 努、井手博子、江口礼紀、林 和彦、太田正穂、岡本史樹、高崎 健

【目的】食道癌におけるVEGF, PD-ECGF(TdR Pase)の発現と臓器再発の予測について検討した。

【対象】1990-1995年に当科における術前未治療食道癌切除例のうちm癌を除いた95例を対象とした。

【方法】切除標本のパラフィン包埋切片をLSAB法を用いて免疫染色を行った。一次抗体はanti-VEGF抗体(A-20)とanti-TdR Pase抗体(日本ロシユ)を使用した。染色性の評価は癌組織の50%以上が染色を強陽性(++), 10-50%を陽性(+), 10%未満を陰性(-)とした。

【結果】VEGFは強陽性(++):32例(34%), 陽性(+):34例(36%)であった。TdR Paseは強陽性(++):45例(47%)であった。深達度、静脈侵襲はVEGFが共に相関ありTdR Paseはなかった。生存率はVEGF, TdR Paseともに陽性例が陰性例に比し不良であった。臓器転移再発例27例を検討すると静脈侵襲陰性が11例もありVEGFは陰性3例, TdR Paseは陰性4例のみであった。

【結語】食道癌における臓器転移再発の予測にVEGFおよびTdR Paseの発現は有用な情報であると考えられた。

I-24 食道癌における癌転移抑制因子MRP-1/CD9の免疫組織学的検討

京都大学第一外科、田附興風会北野病院胸部外科*

内田茂樹、嶋田裕、佐藤史顕、牧野智和、原田英樹、前田賢人、加納正人、渡辺 剛、田中尚、加藤雅之、宮原勲治、今村正之、三宅正幸*

<目的・方法> 1987年から1995年に切除された107例の食道癌について、MRP-1/CD9の発現を検討した。ホルマリン固定パラフィン包埋標本を、抗原賦活化後、MRP-1を認識する抗体M31-15にて免疫組織染色を行った。評価は癌組織の染色性が50%以下をMRP-1減弱群とした。<結果> 食道扁平上皮癌症例の82.2%(88/107)にMRP-1の減弱を認めた。深達度ep, m, sm, mp, a, a₂の減弱群は順に33.3%(1/3), 3.3%(2/6), 48%(12/25), 81.5%(22/27), 100%(51/51) ($\chi^2=35.797, p=0.0003$), n(+), n(-)の減弱群は94%(63/67), 62.5%(25/40) ($\chi^2=17.501, p=0.0002$)で有意差を認め、組織学的進行度の進行とともに、減弱群が増加した。しかしながら遠隔転移陽性、陰性例の減弱群はそれぞれ、86.4%(19/22), 81.1%(69/85)で有意差は認めなかった。減弱群、非減弱群の5生率は、それぞれ30.7%, 73.2%と差を認めた。(p=0.0181)<結語> MRP-1の減弱が食道癌の予後不良因子と成り得ると考えられた。